

## 近代登山の先駆者たち

小島 鳥水  
木暮理太郎  
岡野金次郎

生誕百年記念展

## 華かに日本橋・丸善で開催

『近代登山の先駆者たち』の名のもとに、日本山岳会の巨星、小島鳥水、木暮理太郎、岡野金次郎三氏の生誕百年を記念して、日本山岳会と丸善の共催で、昨年十二月二十四日～二十九日の六日間にわたって記念展が開催された。

会場は、日本橋・丸善の三階画廊で行われたが、連日の大入りの盛況で、一日平均五〇〇名の入場があり極めて成功裡に二十九日に幕を閉じた。小島、木暮、岡野三氏の業績については今さらここで詳述するまでもなく、すでに幾多の文献や本誌でも語りつくされているが、それでも改めて三氏の略歴に簡単にふれてみよう。



歩を築いていた。他方、岡野氏とともに山に登り、明治三十六年岡野氏を通じてウェストン師と知り合い、同三十八

年同士とともに山岳会を設立する一方槍ヶ岳、甲斐駒、常念山脈を始めいわゆる日本アルプスの探検時代にかずかずの輝かしい記録を残し、昭和六年には日本山岳会の初代の会長になった。また、若くして文筆家の地歩を築いた鳥水は本記念展にも出展されているように「雲表」「扇頭小景」「不二山」「日本山岳論」「日本アルプス」等々多くの著書をのこし、比較的アメリカ滞在の長かったにもかかわらず、爾後の山岳関係者に大きな影響を与えたのもこれらの文献による所が大であった。



岡野金次郎氏は明治七年四月横浜に生れ、三氏のうちではもっとも長命で昭和三十三年、不幸にして交通事故でなくなっている。岡氏は明治二十七年鳥水氏と知り合い登山や趣味を通じて親交を結び、後、ウェストン師を発見、その交友を通して日本山岳会創立の気運をつくった人である。氏は生涯を通じて山に登ったが、素朴で質実な



昭和49年(1974年)

2月号(No. 344)

社団法人 日本山岳会  
(J. A. C.)

## 目次

## 行事報告

- 近代登山の先駆者たち…小倉 厚… 1  
濁沢合宿日誌…浅田 治男… 2

## 本 文

- 「叔父のこと」補遺…板倉 勝正… 2  
山梨県における連峰スカイライン  
(自然山岳道路)計画に反対する  
…木名瀬 亘… 3  
イ・エル・ストラットの偉業(下)  
…成瀬 岩雄… 7

## 会員通信(国内)

- 神威岳…川崎 精雄… 4  
飯綱山スキー行と会津朝日岳  
…名須川 浩… 4  
錦城山…山下 久男… 5  
鬼の目山…木本 善重… 5

## 会員通信(海外)

- 北里大学登山隊より…河村 栄二… 6

## 図書紹介

- ヒマラヤの高峰…吉沢 一郎… 8  
嵐の大地…横山 厚夫… 8  
THE HIMALAYAN JOURNAL  
THE AMERICAN ALPINE  
JOURNAL  
HIGHER THAN EVEREST  
…山本 良三… 8

## 会務報告

- 1月理事会… 9  
図書室便り(48年12月)… 9  
ルーム日誌(48年12月)… 11  
新入、復活会員等… 10  
上高地山岳研究所建設資金  
応募者氏名… 11

人柄から山岳会の表面には表われなかった。平塚湘南平の台の上に記念碑がある。

以上のように、三氏はわが国山岳界の創生期における大先達として偉大な業績を残した人々である。

山岳会創立三十周年記念行事として「山岳図書展覧会」を開催したというJ・A・Cとは深いゆかりとつながりをもっているところである。丸善入口には三氏生誕百年記念展を示す看板が置かれ、道ゆく人の足をとめていた。二十四日の開場に当たっては、年末という時期柄にもセレモニーは行われなかったが、予定通り午前十時よりオープンされた。

約二七坪の三階画廊を利用した展示室には、実行委員会各位の努力、ご遺族、その他会員の協力によって蒐集、出品していただいた小島、木暮、岡野の三氏、大先達の著作、門外不出であった数々の書簡、スケッチ、写真類、登山用品など数多くの貴重な遺品が展示されていたほか、三氏を敬慕する人々の写真や遺品を展示され会場を彩っていた。(出展目録本誌三四二号参照)

会場には連日、これら三人の先駆者たちを偲んで、藤島敏男委員長、三田前会長などJ・A・Cの大長老をはじめ、多くの岳人、一般人、学生、果ては子供連れの主婦にいたるまで、多数おしかけ、熱心に展示品に見入る姿や書簡を読みふけるもの、あるいはメモをとるものが後をたたなかった。入場者の波は午前中は比較的少いが昼休みにはピークに達するといふ毎日であり、会場入口には受付簿がおかれ、毎日交代で当番の委員が座っていたが、多くの著名人のサインがみられた。会場内部では、実行委員の努力によってつくられた「山岳」第一年第一号、第二年三号までの覆刻版、同第四十四年

第一号の小島島水記念号のほか「霧の旅」第五十四号木暮先生追悼号の複製版、記念展目録などが丸善の担当者によって販売されていたが売行きは上々であった。また、共催の丸善では世界の山岳地図と本の即売展を同時に行っていたが、こちらは初日より売

切れの地図が目立っていた。この記念展をこのような成功に導いたのは三人の大先輩の遺徳は別にして、蔭の力となった実行委員諸氏の努力には本当に頭の下がるものがあった。準備に当たっては、藤島敏男委員長を中心に、近藤信行担当理事、島田興、織内信彦、小林義正、望月達夫、野口末延、吉田久兵衛、石川治郎、山崎安治、伊倉剛三、野上成男、福田宏年、横山厚夫、神原忠夫、武田満子、山本昌三、鈴木実、高遠宏、油谷次康、伊藤博夫、井口邦夫の各委員が、一致協力して昨年六月より、資料の探索に始まり、蒐集目録、記念号の編集、実行、撤去と文字通り寝食を忘れての努力の積み重ねがなされた。この感想を近藤担当理事は十二月号の会報に「おもえば九月という長いような、短いような奇妙な時間を体験した」と控え目に報告しているが、実は極めて大変な時間であったと推察され、いまだながら委員のひとりとして委員各位のお骨折りに対し、心から感謝している次第である。(写真・文とも小倉厚)

## 「叔父のこと」補遺

板倉勝正

山岳第六十七年(四十八年四月発行)に書いた拙稿は、何分半世紀以前のことを書いたもので、いろいろ説明不足の点があるとの御指摘を受けた。四〇歳前の人々のために、いささか注釈を加えておこうと思う。

まず「遺稿」は、横有恒、加納一郎、坊城俊賢、松方三郎の四氏によって、叔父の遺したものの全部(書翰が約三分の一、卒業論文とあわせて全体の約半分を占めている)を集めるという方針で編集された。これは親戚、知友に頒けるため、限定百五十部が刷られ、叔父の三周忌(大正十四年)に配布された。しかし一般からこれ需める声が意外に多かったため、前記編集者が相寄って昭和五年「山と雪の日記」が梓書房から出版された。これは「遺稿」から書翰と卒業論文を除き、横有恒「追憶」と松方三郎「此の本の由来について、その他」を加えたものであった。黒表紙にエーデルワイス(佐藤久一朗作)がついていて「遺稿」と同じ体裁をとっている。戦後朋文堂が昭和三十三年コマガサ叢書第七巻として発行し、また四十二年あかね書房の「日本山岳名著全集」第五巻にも転載されたが、あかね版には横さんと松方さんの文は含まれていない。昭和四十年「山岳展望の会」なるところから「板倉勝宣書簡集」が発行された。これは「山と雪の日記」に省かれた書翰・論文を複製したもので、体裁は「日記」と同じである(二百五十部限定版)。だから「書簡集」と「日記」とをあわせると「遺稿」が復原されたことになる。

つぎに立山の遭難であるが、これは

横さんの「山行」(大正十二年改造社・昭和二十三年岡書店)の「板倉勝宣君の死」にくわしく、同じく横さんの「私の山旅」(一九六八年・岩波新書)の第六章、「或る遭難の記録」にも略叙されている。三田さんの「偶言二つ」(登高山行第四号)はその直後にこの遭難を回想されたものである。

大正十二年といえ、関東大震災の年で、登山は今のようにならなかつたし、冬山などは例外中の例外という時代であった。その上遭難したのが、アイガー東山稜初登攀で「世界の人」となった横有恒、慶応山岳部で勇名を馳せた三田幸夫、それに北大の板倉という、当時の登山界をリードする人々であったから、新聞では大騒ぎとなった。もちろんラジオも、いわんやテレビなどないころのこと、唯一の報道機関は新聞だけだった。数日にわたって(大正十二年一月二十日から二十四、五日ごろまで)新聞の一面と三面とは、この遭難記事で埋めつくされた。遺体引取りのため富山駅に降り立った父の写真が、三面に大きく載っていたのを今でもハッキリ覚えてい

る。また「嗚呼板倉農學士」という際物の浪花節まで作られた。(大正五年の破風「奥秩父」遭難の際にも「破不の山風」という薩摩琵琶ができたそうである)

現在松尾峠と芦峰寺に慰霊碑があるが、松尾峠の方の所在はすこぶる分り難く、先年山行の帰途随分探したが結局見つからなかった。年輩の地元の人々の案内でもなければ分るまい。菩提寺の駒込吉祥寺の墓には、旧藩士国分三老老人の追悼文が刻まれている。

この秋(四十八年)勝忠伯父が八十六歳で逝ったので、叔父の兄弟は皆死んでしまった。その後間もなく、私は奥穂小舎で松方さんの赴報を聞いた。しかし坊城さん、伊集院さんなどは健在なので、機を見て叔父の話の伺いに参上しようと思っている。(一九七三・十二・一)

## 潤沢合宿日記

青年懇談会

本年も青年懇談会の夏山例会を、北ア潤沢において八月十五日(二十六日(昭和四十八年)の期間行いました。昨年は延七十八人強のメンバーで賑わった例を参考に、さらに充実した合宿をめざしたではありませんが、事前のPR不足と、合宿の天候不順がたたり残念ながら、わずかの参加者しかなかったことは、今合宿に尽力頂いた関係者諸氏に申し訳ないことを致しました。来年充分なPRを行い、魅力ある良いものにしたと念じています。

以下は、十日間を通して天幕キーパをとりとめてくれた、勝山君の潤沢日記を付記したいと思います。なお来年は上高地の山岳研修所を利用し、天幕場も行きたい、岳沢に変更するなどして多くの参加ができるようにしたいと思っています。

### 潤沢日記

8月15日 荷上げの学生2名、高橋会員と共に新宿発。

8月16日 (曇→小雨) 重い荷物にあえて潤沢にあがる。この時は連日会員の方が多くなるものと期待してたが……。

8月17日 (曇→小雨) 高橋氏と南校を登るが、滝谷はガス、小雨もパラついているので潤沢へ下る。西奥会員同伴者一名と入山。

8月18日 (雨) 晴れる見込みがないの

で高橋氏下山。

8月19日(雨) 西奥氏雨の中を下山、荷上げの学生二名も下山、この日よりさみしく一人となる。

8月20日(晴) 友人に洞沢で会い、東稜を登り二尾根P.あたりで昼寝をする。

8月21日(晴) 今日、あたり誰か入山するのではと内心期待をして待ったが誰も来ず、ガックリ。

8月22日(晴後雨) 友人にさそわれて四尾根に行くがツルムの裏側で雨に降られグシヨリになって洞沢へ、本日も誰もきていない。

8月23日(雨) 入山者なし。

8月24日(雨) 入山者なし。

8月25日(雨) 屋頂雨の中を学生部の岩本氏ひょっこり現れる。本日まで入山者なしを告げ、今日中に一緒に徳沢へ下ることにして準備を始める。

とこに北沢氏、浅田氏相続いて入山、天幕の中もやっと六日ぶりにぎやかなり。

8月26日(雨) 雨の中を撤収。入山より重い荷をしょって下山する。入山の期待は完全にくつがえされた山行であった。(勝山記)

### 青年懇談会のこと

四十八年十二月をもって発足以来満二年を数える、青年懇談会について若干述べたいと思う。

四十六年十二月に創立総会を起して正式に発足した、青年懇談会もそれまでに数回の打合せを行い、意義、目的など、どのようにもつかは激しく討議された。結果はですのま、発足に至ったが、全てのメンバーが、日本山岳会に若い息吹きを、吹き込むことに胸をおどせたものだ。実際結論をだすには、日本山岳会の歴史に対してあまりに短い時間での発足であった。可能性に対して欲張らず、メンバーに対し

ては制約のない、ユニークな会にしたいというのが皆の気持ちのようであった。

実際の活動は、月二回の例会(第二・四金曜日)を基に、数々の計画が立てられ、実施されていった。夜中に冬の冷たい水で米を洗った餅つき会、冬の八方尾根におけるスキー懇親会、そして初夏の奥多摩で魚釣会、事後のバーベキューがうまくいった。そして、第一回の洞沢合宿、盛会であった。それから映画会や、その他集会などのタイアップによる数々の催しへの参加、その間、日本山岳会においては学生部との合併がはかられ四十八年四月よりは青年学生懇談会となり、メンバーに現役の学生部委員をも含め、若干のO.B.も入ってきて元気に活躍してくれているが、しかし最近の例会は創立当時のメンバーの顔が少なくなってきたのは誠に淋しいかぎりである。無目的か、魅力のうすい会であるからか、得るものない会であるからか、考へはおよばない。とりあえず二年の歴史はJ・A・C.の歴史に較ぶべきものではない。だがその中でもっともユニークな会であることを誇り、のんびりいきたいものだ。日本山岳会員の若人よ来れ。(浅田治男記)

### ☆上高地山岳研究所

募金状況(49・1・31現在)

#### ※会員

応募件数 五三〇件

金額 四、三〇五、九〇三円

目標額対比 八六・一

#### ※一般

応募件数 五件

金額 二七三、〇〇〇円

目標額対比 二七・三

## 山梨県における連峰スカイライン(自然山岳道路)計画に反対する

### 問題の立脚点

すでに山梨県において連峰スカイライン計画が立てられてから何年かの時間が経過した。この計画に対して多くの意見が述べられ、反対運動がなされてきたわけであるが、最近の激動が世の流れの中でこの問題に関する立脚点を確かめてみたいと思う。

この計画は河口湖からはじまり、笹子峠から大菩薩連嶺を通過して柳沢峠に至り、青木林道を通じて笠取付近で二つの案にわかれる。一つはさらに雁坂・甲武信の奥秩父主脈を行くA案であり、他の一つは広川谷をおいて笛吹川を渡り、乙女高原・木賊平を通るB案であって、両者は金山高原で合流し、そしてこの問題が自然保護の立場から重大であるとして国会で取上げられてから、自然山岳道路と変名して、スカイライン計画はなくなったかのような形をとっている。しかしこれを分析してみると、B案の中にある部分(工事困難で費用のかかる部分)の計画は「一応凍結」という言葉で後回しにして、工事しやすい部分は「優先着工」ということで工事を開始するわけである。たとえば金山高原から木賊平の間は優先着工となっているが、これは明らかに御岳昇仙峡のグリーンラインに

### 木名瀬 亘

つなぐスカイライン計画の一つに他ならない。

### 自然保護の立場からの反対

このスカイライン計画に反対する論点をまとめてみると自然保護の立場からの議論として

- 一、山岳道路をむやみに作ることは自然景観を著しく損ねる。
- 二、大規模な山岳道路の建設はそれが尾根を通る中腹を通るにかかわらず、土砂や岩石の投棄による山腹の崩壊と溪谷の埋没の被害はさけられない。トンネルの工事の場合でも掘られた土砂や岩石の処分問題は同じである。
- 三、動植物生態系に与える被害は想像以上に大きい。これは同じ山梨県の富士山のスバルラインにおける御庭奥庭の破壊、野呂川林道の北沢峠を抜けるスバル林道工事による高山蝶の絶滅問題により明らかである。
- 四、スカイラインにはいるまでの山村地帯の環境の悪化。これは奥多摩有料道路によって落着いた南秋川の山村は増加する自動車の騒音と排気ガスになやまされ、交通事故の危険のため、溪谷沿いでは子供の遊び場まで失われつつある。
- 五、このスカイライン計画の中の地域は日本における代表的な溪谷美と森林美を残している貴重な地帯であり、その美しい自然を後世に伝えることはわれわれの義務である。

### 社会経済的な立場からの反対

以上が自然を守る観点からの意見であるが、別の社会経済的な立場から述べれば

- 一、いたずらに大規模な山岳道路計画は単なる仕事をするための建設事業に過ぎず、破産した列島改定論と同じである。
- 二、過疎対策のためと云われるが、スカイラインは過疎問題の解決にはならず素通りする自動車の公害をふやすだけである。箱根などは道路を作り過ぎて魅力が失い、旅館は不振となった。過疎対策を問題にするならば、たとえば廃線となった落合・丹波間のバスを復活すべきである。
- 三、有料道路の収入により福祉事業・教育・病院がうろうおうという説明が果からなされているが、数百億の膨大な借入金返済の利息を考えれば、それだけの金をあてた方が余程早い。
- 四、日本全体としても工業偏重・建設工事優先の政策は世界の石油危機の嵐の中ではやはり立たない。不急の山岳道路工事にエネルギーを浪費するのは賢明でない。
- 五、山梨県は日本最大のぶどう産地であり、日本産業の中でも最も伸びているワインに主力を注ぐとか、石油不足により天然せんいが見直され生糸産業が伸びつつあるとき、産業構造への先見性こそ重要である。

### 自然保護は愛情の問題

ともかくこの山梨県スカイラインの問題は県の問題以上に日本全体の問題として重要である。奥秩父の原生林が乱伐されるようになってから年久しい。北海道から九州に至るまでの原生林の中で最も美しいと云われた和名倉山の仙波のタル付近の木を切ったとき不吉な前兆が始ったのである。最近では大洞川のバラクテ尾根の木が切られたと言う。笛吹川の西沢溪谷がべ



ニスの国際観光写真で入賞したように日本の代表的な景色は富士山や日本アルプス以上に奥秩父の山々であったことは、私もヨーロッパの山を歩いた時に痛感した。ヨーロッパアルプスの岩と水と雪は日本アルプスのそれよりも美しい。しかし奥秩父のように美しい新緑と燃えるような紅葉に包まれた溪谷美、奥深い山村、これだけの大自然と人間の接点の美しさはヨーロッパでは見られなかった。

自然保護の問題はつまるところ美しい山河に対する人間の価値観と愛情の問題になる。山を愛する人々々の心の中には必ずや存在しているに違いない。しかし私もこういう問題は面倒くさいと迷腰になり勝てた。二つの山が駄目になったら他の山へ行けばよい。山はいくらでもある」という考えは結局は自然を亡ぼし、人間も亡んで行く一つの過程であると考えられる。

山河を守って後世に

この反対運動を通じて思わねること  
は尾瀬以上に奥秩父のこととなると真  
剣に立上ってくる人々が多かったと  
いうことである。奥秩父がスカイライ  
ンで傷くのがいつわらざるような氣  
がするのがいつわらざる心境であら  
う。現在の八ヶ岳や谷川岳・アルプス  
に比べて登山者は少いとは云え、利害  
でなく無条件に愛されている奥秩父は幸  
福な山だと云える。われわれはこの山  
域に生きてきた素朴な人々と個性的  
な小屋の主人们とともにこの山河  
を守って後世に伝えたいと思う。

第二回・山岳史懇談会

日時 三月十三日(水)午後六時、ル  
ムにて テーマ「高旅行部の足跡」  
講師 日高信六郎、大木操、中塚葵己  
男三氏 図書委員会

会 員 通 信 ( 国 内 )

神威岳

川崎 精雄

四十八年九月から十月へかけての私のシルクロード旅行計画は、出発まぎわで中止（人員不足）となった。岩ぎ支支部の佐藤彦彦博士から「当君手医大の調査網によれば、貴兄の計画は中止の由でお気の毒」と冷やかされた。そこで北海道の山へ計画変更、望月達夫君に頼むと早速彼地へ電話してくれ、数日のうちに札幌の会員高沢光雄君から速達がきた。十勝岳（同行するほかJ・A・C支部集会、岩別岳）への参加まで含まれたプランだ。

二十日空路札幌へ。七、八年ぶりの札幌は建物大型化が目につく。丸善により高沢君及び會員小林年、石崎貞子両君と相談。「大雪山あたりの定食コースは気に入らないでしよう」というわけで、小林、石崎両君と二十二日からウベベンサンケへ登ると決まった。この山へ西側の沢から登るのは両君共初めてのも由。小林君はチャムラン初登の北大隊の一員だし、石崎君は今夏カダダの山歩きをしてきた人だから優秀な同行者だ。

高沢君宅に泊めて頂いた翌三十一日はすばらしい秋晴だった。ウベベサンケへの出発を前に、今日は静養したらという同行者の意向もあったが、こんな快晴を無駄にしては、東京から何しに来たか、と北海道の山に笑われるだろう。

出勤の高沢君と同乗したバスの窓から、遙かに神威岳の特徴ある岩峰がくっきり見える。私の目標はこの山にしぼられた。地下鉄終点の真駒内から定山溪行きのバスに乗る。

乗客の少いバスは快適に走る。百沢橋下車（九時四十五分）左岸に渡ると備付登山者名簿がある。今日の記名は私だけ。北海道の第一日が単独行で、秋晴の山とは恵まれている。

百松沢に入る道は広く、紅葉は稍早いが、爽かな風に時折木の葉が吹かれ舞う。溪流の音が気持ちよい。一時間ほどで岐路の左手に登山口の標があらった。ここまでの途中ですでに「遠い山に近い山」の写真で見覚えのある神威頂上の岩峰を望見出来た。登山道に入る最初の沢の橋は、完全に落ちていた。岩峰を正面に進む広い道は、小沢に行きつて細い道に一変、やっと山道らしい感じになる。そろそろ熊か出現を怖れるあたりで、藪の中でさつという音がしたので、思わず息を呑んだら耳探りだった。

潤葉樹と笹の原生林の中を、同じ傾斜の登りが続く。両側の沢には、滝がなさそうな気配だ。神威岳を軽視して、電灯も雨具も持参しなかったで、急がねばならない。案内書にある展望台というのは、尾根の向う側が見えるの、だろうかと思ひ、足を速めたが、なかなかかその地点に着かない。

どうやら展望台は、神威の頂上が眼前に仰がれる地点のことらしい。そこから仰ぐ岩峰は、木々が紅葉し、雲が去来して気持よい景観である。全然ノーストップで登り続けるので、全身汗びっしょりだった。ジグザグを繰返して頂上に立ったのが零時五十分（出発点から三時間）誰も居ない頂上。

とても食べきれないと思った高沢君  
差入れの握り飯は、一気に腹に納まっ  
た。紅葉した菰木の間から札幌の街が

眺められる。隣の百松沢山が藪に蔽われて、見かけは楽々と行けそうに見える。西南に連らなる澄んだ尾根は、無意根連峰だ。

日没を怖れて、三十分の休憩で帰途

につく。三時を過ぎると秋の陽はもう冷たい。静けさの満ちた山は、内地も北海道も同じだ。足を速めて広い道に出て、渴いた咽喉をうるおしながら、岩峰の姿に一別する。

百沢橋掃着四時十五分、案内書の間より大分速かった。十分待つとバスがきた。藤ノ沢下車。ここにはC大山岳部以来の親友遠山秀夫が家を新築している。彼は私の家の近くに広い自邸があり、頻繁に往來してゐたが、戦後自宅をそのまゝにして東京を嫌ひ北海道に來て教職に就き、停年後自適の生活を楽しんでゐる。七、八年前私と家内が定山溪に來た頃、この辺は家まばらで、家を建てるによい所だと話し合つたが、山の親友がここに住み付くことは夢想もしなかつた。

尋ね当てた家は丘の上で、観音岩山

などの眺望がよい。遠く余市岳や無意根も見えるらしい。ダリヤの咲いた花は開口からいきなり「おーい」風呂を頼むようにと声をかける。二十四年ぶりに顔を見て、話をしたのだが、昨日会っていたみたいな感じだ。ビールで乾杯、太みたに山の話を交して、八、九日後（山行後）の再訪一泊を約して、八時半ホテルクシに乗った。澄川の札幌山ノ会ルームには、高沢君が待っていてくれ、同宿した。（注・この神威岳は南日高のそれではない・筆者）

## 飯綱山スキー行と

会津朝日岳

名須川 浩

一九七三年中の登山から、二つご報告します。

×

×

×

年会員の野口末延さん、会員松家

晉君と私の三人で二月二十七日飯綱山

スキー登山をやった。リフトで瑪瑙山

頂まで運ばれて薬をしたが、そこから先は風で雪煙が走り、アラザシを付けていてこずりながら、二時間余かけて飯綱山頂上に登りついたときはほんとに綱山頂上だ。日本晴れで、北アルプス、頸城山塊、上越の山、南は遠く富士山まで三六〇度の展望は指呼しきれなかった。風が稍おさまり、飯綱神社のピークに廻った。半ば埋れた社屋の風陰に凹んだ日なたを見つけて三人で、おさまつた。「ゴビーにしますか、紅茶にしますか」と、松家君からは、贅沢な熱い飲料物のもてなしを受けて、食事時間ゆっくり楽しんだ。中社に導かれる尾根にもシュブールはなかった。雪質は重かったが、昔懐しい杖制動で無難に斜面をこなしていく野口さんとともに、高距八〇〇mの長い下りを息を休ませながら、夕方中社スキー場を下りついて、その食堂でひと休みしたが、野口さんとの風貌やわれわれの戦前型のスキー帽、イタヤスキー、脚絆などが人目につくようだった。そのうちに野口さん七十四歳にして飯綱山を越えてきたかくと分ると居合せた地元の若者をいたく驚かせた。遂に感心した一人が荷物全部担いでバス停まで十数分の夜道を案内してくれた。からだも気持もほのぼのと暖まってその後には、珍らしい(三月八日の朝日新聞には、珍らしい老年のスキーヤーとして、野口老の写真入りでこの日のことが報じられてい

会津朝日岳をめざして、私が白沢部  
 落を後にしたのは五月二十三日であつ  
 た。赤倉沢を遡つて、急な尾根道に移  
 る手前でこの日は宿営することにし  
 た。細い木にポンチョを被せて地面に  
 引っぱり、蝙蝠蟻の形にしてその下に  
 潜り込む。頭巾の穴は紐で結ぶ。今晚

## 山下 久男

それに、時間の都合はつき易くなった。平日に行くからいつも乗物は混まないし、山は人っ気がなく静まりかえっているのが嬉しい。(一九七三年十二月六日記)

この山は加賀の大聖寺町の西端にある。高さ五十六mにすぎないが椿や椎や松などの常盤木につぎなれて鬱蒼としてゐる。山腹は笹がはびこり、葛が這うて、自然の野趣をそのまま示している。頂上付近には十数本の樺がたちならび、天空さして亭々として聳え、長い枝を鵬の翼の如く四方に張っている。この山上に南北朝から戦国時代にかけて大聖寺城があった。慶長五年八月三日、この城に拠っていた山口宗永城主は、金沢藩前田利長によって攻め落とされ、その子と共に自刃した。山口父子は西軍石田三成側にたっていたから東軍側の金沢藩に滅されたのである。

この城址の東側の麓に、大聖寺十万石藩主前田氏の代々の藩邸があった。その藩邸のあとに錦城小学校の校舎が今たっている。千四百余の児童が、現にここに学んでいる。深田久弥氏は明治四十二年四月一日、この学校の尋常科一年生として入学し、大正四年三月二十八日卒業された。在学中、しばしばこの山に登られた。この山上からは江沼郡の刈安山、ガンノメ山、小富士鞍掛山、富土ヶ岳、小大目山、大目山など大沼の山々が一望のもとにおさまられる。それらの山々の彼方に、王者の如く、或は女神の如く、高く白山山連峰が、晴れた日には天空をかきり、その山脈は波濤の様に北に走っている。深田久弥ならずとも「吾、いつか

はかの山々に登らんかな」の思いにかられるだろう。深田氏の登山の原点は白山からとしばよく云われている。私もそれはそうだと思うが、もっと週ればこの錦城山からと云いたい位である。その頃私も度々この山に登った。錦城小学校の講堂に、その頃、次の額がかげられていた。それには「至勇、至正、至仁」の太文字が書かれていた。大聖寺出身の海軍大将爪生外吉の揮毫になるもの。その時分の校長は赤いのだといふ説をなす者もいた。この校長は講堂で訓話をする時「錦城山の錦の如く美しい心を持て」と諭されるのが常であった。訓話がすむと、オルガンに合わせて、吾々は「金剛石の歌」を斉唱した。この小学校には校歌はなかった。「金剛石の歌」があったのである。

この学校は明治六年三月十日に創立、今年三月十日で百周年を迎えた。私は同窓生の故をもつて、同窓会長から、二年前に、この学校の百年史の編集を要請され、その衝に当った。同校の卒業生から「思い出の記」五十数篇を得た。井上善雄君（銚汰本改め）はその思い出で、錦城山での眺めを、「天氣のよい昼休には錦城山に登り、脚下にわが町を、遠く白山連峯を、近く富士ヶ岳に連なる低山を眺め、大自然の偉大さに教えられるものが多かった」と述懐されている。この井上君は深田さんの一年後輩である。井上君は法政大学在学中、同大学山岳部にいて、山岳部誌「山想」の創刊を図りこれを實現した。

昭和四十八年十一月四日、この学校の創立百周年式典が、秋晴の好天に恵まれて、盛大に挙げられた。この式典

で、深田久弥氏の作詞になる校歌（第一節）

「白山の峯は さやかに、  
強き子ら ここに集いて、

玉とねり、鏡とみがく、  
あゝ錦城、輝くほこり」

を力づくで斉唱した千四百余名の児童の健かな顔とその黒い瞳。それを深田さんは莞爾としてながめながらこの斉唱を聴かれたことであろう。錦城山上の十数本の樅の大樹の枝々の緑、その色もいよいよ、濃くなって行く様に思われた。(昭和48・11処稿)

鬼の目山

木本 善重

去る十一月三、四日の連休を利用して野口支部長以下九名で祖母、傾園定公園の南端にある宮崎県北方村大字鹿川、今村所在の鬼の目山に登ったので概要を報告します。

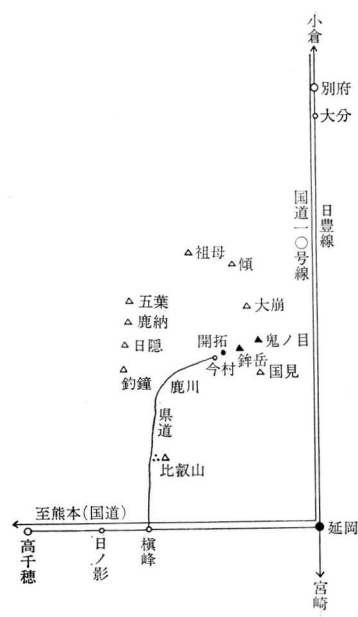
日程は三日七時四十五分別府発臨時急行で三人、六時三十分発の車二台で六人が行き十一時二十分高千穂線峯駅で合流しハイヤーと共に二十キロ大朋寄の今村まで乗車、徒歩三十分で開拓村に到着して TENT を二張した。途

中名勝比叡山の千疊敷岩等の奇岩峽谷を賞して十四時設営時間があつたのを以て、鬼の目山や大崩、五葉、唐納、日隠、釣鐘山の全容を偵察に出掛けたが紅葉の秋色には全く魅せられなかった。しかし大崩原生林の伐採には心が傷んだ。キャンプに帰ったら若い者がご馳走を用意して山中で思わぬ紅葉見の懇親会が出来、二十時就寝した。三時醒めて外に出たら青空平明の下、満天の星は街で見れぬ美しきだった。

四日六時起床八時軽装で出発する  
キャンプ地約六〇〇m、鬼の目山一、四

九一m、距離約8km、高低差約九〇〇mである。南端の鉾岳一、二七七mは男猪、女鉾に分れ約一〇〇mの絶壁に囲まれており山頂部は北部が鬼の目山、南端は熊笹と二〇〇mの疎林である。鉾岳の南斜面幅三〇cmの小径を伝って鞍部の極楽河原(仮称)に出て小憩する。花崗岩の一枚岩で絶景である。河原を廻行すること一キロ、ようやく地図と磁石で方向を定めて鬼の目山と信じて笹分けをやる。猪と間違えられぬ様に「ヤッホー」と人間様のお通ひだ」と叫びながら高い方へ尾根根に登る。二十坪位のヌタ場(竹のない猪の遊び場)に出て驚く。

正午過ぎ地形的に頂上らしいところ





に下りや々と来た道に出て、落葉おりしく晩秋の山道を楽しみながら十七時にキャンプに着きテントを撤収して十七時三十分今村発、帰りは二台の車で二十二時三十分全員無事帰別できた。

往復の行程約二〇〇キロ、二日とも好天に恵れ目的を達して有意な山行であった。鬼の目山はあまり人の行かぬ道のない山であるが、途中の樹林と云い、絶壁と云い、滝と云い、高くないがこんな良い山があったのかと驚いた。三年前釘宮さんと鉦岳に登り鬼の目に未練を残して帰ったものだが聞けば氏は二十三年來の幻の山であったとかで大変喜ばれていた。終りに今度の山行は六十六歳の氏が終始ご指導下さったことを厚く感謝いたします。(東九州支部委員)

## 会 員 通 信 (海外)

### (北里大学登山隊より)

### カンジロバ山群への旅

今度は先日急死した二豊山岳会長の追悼登山として別府市在住のJ・A・C会員野口、三谷、木本の三名と二豊の大林副会長以下五名と釘宮元岳連会長の合同登山であったが、この密林の中を一発で頂上三十三点に着くとは奇蹟であった。J・A・C入会を前にして急死し、死の前日まで私と鬼の目行を打合せていた石橋会長の魂の導きである等因縁めいた話もある次第。彼の愛用の帽子を埋めて黙祷しさらに七五歳の三谷長老の発声で万才を三唱した。十三時五十分出発して帰途に着いたが、一度通った笹藪はすぐ元通りになるので二度と来た道は通れず、止むなく新な道を求めて笹分して谷合の小川

前略、お元気にお過ごしのことと存じます。アマゾン行きでお忙しいことでしょう。私達カトマンスでツウイン・オッター三機チャーターして待機しておりましたところ、九月六日に二機、七日に二機飛び、隊貨を残さず積み、全員ジュムラに集結いたしました。九月九日、偵察隊二名、シェルバ一名、ポーター八名出発。九月十二日、本隊四名、シェルバ二名、ナイケ一名、ポーター七名、隊貨二・八トンで出発。モンスーン中ですから毎日降られま

したが、早くモンスーンが明けてしまふ方がかえって心配でした。またリコットで担夫換えて、ソワ(ソツビヨともいふ、ヤクメ牛)十一頭、担夫五七名の隊となし、ジャグドゥラ・コーラの方へ一たん高捲きしてこのコーラを越え、九月二日には四、一〇〇mの所にキャンプ(ガルブ・コーラ)の途中、四、二二五mの所に寄り道してみたら、カグマラ連峰、ナウ・ムリまで実に良く眺めることが出来ました。

カグマラ峠は雪がついていれば人夫が通れないと心配していましたが、運よく通過出来ました。(私の高度計では四、八八五m)

下りはコースが長く人夫も音をあげていました。ブンブン・コーラとジュルン・コーラとの合より約三〇分下った所でキャンプ、ブンブン・コーラの上流を偵察している先発隊と合流し、守山とシェルバのブルバがジャンク・シン・ピークとウェッジ・ピークとの間のコル(五、二〇〇m)に立ち、ハンギング谷を、そしてまたブンブン・コーラ(五、〇二五m)に立つてボクスンド・コーラをみたところではとても通過不可能ということでした。

私もブンブン・コーラの上流をみてきました。渡辺隊の撮った写真はかなり手前で、ジャンク・シン・ピークはもっと奥で、とてもきびしく、簡単に登れるところではありませんでした。話が戻りますが、ラ・シャンマはすばらしい山ですね。しかしこれを登るとすると、この山だけで終りということになると思います。

これらの登山については英国の女性隊についたシェルバ、バサン・ソナムの話がありますが、帰国してからいたします。

ボクスンド谷の右岸をへずり、阿部・吉永隊のABCを置いた地点にBC(四、三九五m)をおきました。(九月二八日、十五時)そして九月二九日十時、正式にBCを建設しました。

BCに入る九月二八日は快晴でカンジェラルワ山群が実に良くみえました。その水壁を目の前にして感激しました。BCの直ぐ前にツオカルボ・カンが聳えています。

ハンギング氷河ピークは氷河をつめて五、五〇〇m位のコルに登らないと見えませんので、まだ誰もみておりません。

以上今までの経過をご報告いたします。皆様に書けませんので吉沢さんに代表してお手紙を差上げました。(四八・九・三〇BCにて 明朝メイル・ライナーがでます)

## 同第二信

私達はお陰様で元気で行動しています。去る一月三〇日(一時二十九分)隊員の守山栄賢、武市守弘とサーダーのアヌ・シェルバが無名峰(六二二七m)に登頂いたしました。

九月二九日BC設置、九月三〇日から一月九日まで連日雪、BCで八〇〇m、一月六日ABC(四九八〇m)、一月十五日、C1(五二二〇m)、ボクスンド・コーラの流の氷河の上、C2はツオカンボ・カンと無名峰との間のコル(五、四八〇m)のこの高度に関しては、地図上の高度より皆私達の高度計は(一〇〇二〇〇m)低く出ているようです。このコルを越えるのが一寸大変でした。

三〇〇mフィックスして雪庇を破り、コル上にC2設置(一月二二日)。これからハンギング氷河峰群への氷河下りは、始めの三時間ぐらいいよいのですが、それから先は氷瀑、氷塊、クレバスなどが連なり、下ることは不可能でした。そこでこの周辺を四五日偵察して最初の目標の一つにしていた無名峰を登ることになりました。

この無名峰には主峰、北峰、東峰、南東峰とありますが、この北峰の北西稜に廻り込んでアタックする方法をとりました。

北峰の北壁の下にC3(五、六〇〇m)をつくり、この壁をトラバースして、北峰の北西稜に登り、北峰に立ち、稜線通しに主峰に登るという方法をとりました。

C4(五、八一五m)を一月二九日つくり、上記三名が入り、一月三〇日、快晴を利用して登頂しました。

一月一日頃BCを撤収して隊を二つに分け、一隊はイカダを組んで対岸(ボクスンド湖)に渡り、東部山城を、他は南部山城(カンタガ付近)に入る予定です。

日本には二月二日頃帰国するようになるとおもいます。ブンブン・コーラ、ジャンク・シン・コル(ジャンク・シン・ピークとウェッジ・ピークの間)からハンギング谷、ジャグドゥラの支流の源流(ハンギング北谷)の様子も撮ってきました。詳しいことはお目もじの上お話しいたします。山名はSekka Doima(セルは金、クは仏像、ドルマはカンジロバ・ヒマールの有名な女神の名、チベット語です。女神の像に似ていることからつけました)とすので、乱筆乱文で失礼します。(四八・一一・八・BCにて)

吉沢一郎宛 北里大学一九七三年登山隊 隊長 河村 栄二

### △近代登山の先駆者たち▽

鳥水・理太郎・金次郎生誕百年記念出版  
〇頒価 一、〇〇〇円  
〇荷造り送料 二、〇〇〇円



国王にとってはチロール地方は、国内の最後の望みの地方であったが、最早、之も望み難しとあつては一刻も早く国外脱出より他に安全を期し難しと断じ、其夜遅く国王の許に引返し、国王に覚悟を促したところ、初め、「皇帝として脱出するならよいが、夜蔭に乗じて泥棒の夜逃げの様なのはいやだ」との御言葉であつたのでストラットにとってはここで一先ず一歩前進、皇帝一家の国外脱出の決意は言葉を取りつけ、連立内閣の提出する三条件の中の一つにも譲歩はしたものと、漸く安堵はしたものの、未だ図に乗つたレンナー党首の強行申出が後に控えていたのであつた。党首としての威厳とハッタリを利かしたいレンナー党首はまず国王の脱出の際には身体検査を行う等という甚だ失礼な申出を成したのであつた。ストラットは勿論そんな事で譲る由もなく、今は何んと言つても圧倒的優位にある聯合軍側の英国の軍服を身にまとつた現役のパリバリであり、ツイ先日レンナーとの強行談判の節にも勝者の優越感を幅を利かせて、今や風前の燈火にも等しき敗戦国の一政党の輩のその態度は何んたる無礼ぞや……今後は「小生には直立不動の姿勢を以て接せよ……」と一喝したる事もあつたので、そんなものに聊も屈する筈もなく国王自身の個人的身の廻り品以外は絶対に持出す事などない……英政府の名に於て之を誓う……と怒りをこめて宣言したのに空しく取下的たレンナーは引續いて国王出発の節、万一の突発事故を警戒して高等弁務官の同行を敢行する旨の申出をなすのであつたが、ストラットは断固「御望みとあれば弁務官の同行も宜しいが万一、重大事で動揺したらストラット自身が率先、一発ブツ放すぞ……」と威嚇の言葉を浴びせ、更に逸早くボケットより英政府宛の電文「オース

トリヤ首相は国王が退位するのでなければ国外脱去の許可を拒んでいる。斯くなつて以上、今後オーストリヤ向けのために現在続いている食糧品の輸送はストップする旨、事務局に発令を乞う」の英政府宛の電文を「之れ見よがし」にレンナーの机上に提示したのであつた。最早早く追詰められては敗者の弱味。レンナーも遂に茲に至つて初めて「Grasse Gort」と叫んでカプトをぬぎ「宣しい。国王脱出は無条件で……」と屈する言葉が終り切らぬ内に「皇帝脱出は皇帝として行われるのだ……」とストラットは繰返し何度と声高に叫んで先ずこの偉業の前途は一段と前進、展開されるのであつた。本来ならばオーストリヤ向け食糧輸送

## Edward Lisl Strutt

### イ・エル・ストラットの偉業 (下)

成瀬 岩 雄

停止等という事は協商の手前、英国のみで独断決定出来るものではない……重要事項なのであるが其処はストラットのオドシ、威嚇、英軍の正規の軍服が厳然幅を利かしたと云うところだろう。アトはストラットの独壇場。即日ウィーンに引返して召列車の準備に手落ちなきか確めいよいよ明日出発と事は一瀉千里に運ばれて行くのであつた。

明くれば三月二十三日。早朝より王宮前には数多の民衆が群がり皇帝に最後のお別れを惜しむのであつたがストラットとしては尚一沫の不安がフト頭に浮んだのはその昔「ルイ十六世のフランス脱出の失敗、首切台にのせられた十六世に民衆は拍手を送つた」というあの時の惨事が或は此処にも……」と

思わず脳中にヒラメクのであつたがかし之も杞憂に過ぎず、出発時刻は刻々に迫るのであつた。午前十時、国王御一家御出席のもとに教会における最後のミサ、最後の国歌が唱せられた時には此処彼処は号泣する民衆の声に埋められるのであつた。午後五時四十五分、ユニオン・ジャックの翻える荷物車より列車への最後の積み込みも終る電報用のために敷設されていた電線を待従長、ジョントラのために一本だけ残してアトは全部をツタツタに切断したのであつた。この時、皇帝はストラットを側近に召されハプスブルグ家伝来の重要書類箱、数多の宝石箱に「ストラット」の名前のラベルの貼りつけて

あるのを示され之等の鍵を渡されるのであつた。更に多額の金の入った箱、宝石の小箱を受取つたストラットは両ボケットに急いでネズミ箱の二つを六時三十五分、いよいよ皇帝、王妃、王子、随員等の二十数名の乗車開始、ストラットとジョントラは次々に反対側のドアより召列車に最後車輦に乗り、デッキに立たれた皇帝はややうつ向ききみの姿勢で号泣する民衆に向つて「我がオーストリヤ国民……また、いづれの日にか……」と軽く会釈を施されストラットの「出発」の合図にお召列車は故園を後に動き出したのであつた。時に午後の七時五分。間もなくストラットは皇帝、王妃を中程のお召列車に御案内申上げると皇帝は悲しげに「After 700 Years」と小声で

洩されるのであつた。やがて食堂車に用意された軽食を前に陪食を仰せつかつたストラットは王妃の側に暫し談笑申上げる内、王妃は「私の一家、ブルボン、イタリア、ポルトガルから追放され、私が結婚した時はオーストリヤ臣民として嫁いで来たのであつたが今やオーストリヤから追放される……一休私は何処の国の臣民なのでしょう……」と嘆息されるのは御答えする勇氣もなかつた云々。十時三十分、全員漸く消燈、寝についたのであつたが、ストラットは両陛下の次の間に坐して終夜一睡もせず短簞銃を傍に独り夜明を待っていたのである。翌、二十四日、早朝眼覚められた王妃にはいと晴やかに微笑を浮べられ「私の連発ピストルは重くて……」と仰せられるのであつた。七時三十分再びミサが行われ末だ列車がスイス領に入る前に停車駅毎に英兵が整然と立並び、英国にとっては敵国であり、敵地であるこの地において敵国、国王に対して挙手の礼を捧げるのに眼を止められた皇帝はひやかに感涙を拭くておられた……と王妃はストラットに告げられるのであつた。午後三時四十五分ビタリ、予定通りスイス領 Bückles に到着、スイス政府代表の外務省官憲のお迎えを受けられスイス到着後はいかねてのスイス政府との打合せ通りコンスタン湖近くの美しい森に囲まれたブルボン王家のシャレーに落付かれたのであつた。

翌朝、ストラットは早速王妃の許に宝石を御届したのであつた。時に一九二二年三月二十五日。この二週間後ストラットはベルンの英国領事館より再びトルコ前戦に向う様電報を受領、彼の Special Mission は茲に終止符を打ったのであつた。この帰任に先立ちチューリッヒにおける

皇帝の御招きによる慰勞、感謝の晩餐会の席上、王妃からは特に「Only an Englishman could have accomplished what you have done for us」なる有難き御言葉を頂戴し、感激の余り何んと御答へ申上げたか今以て判然覚えていない……夢の様に I kneel and kissed her hard と、四月十九日付の日記を記し、更にトルコ帰任後「一月前には我れ、独裁者……今は名もなき一人軍……」と記して彼の日記も茲に終止符を打ったのである。この最後の彼の淡々たる心境を語る名句は正に稀代の名言とも云う可きではないか……。

この苦難の大偉業より数えて三十八年を経た一九五七年、英国山岳会はたまたま創立百年祭を迎えたのであつたが、事件当時、芳紀正に二十六歳の美妃であられた王妃は最早六十歳の還暦を過ぎていたのだが、アルバイ・クラブよりの招待状に対し次の如き謝辭と祝電を贈られたのを見て如何に王家が永くストラットの勇敢なる行為に對して感謝の意を抱いておられたか……が同じ知られるのである。Empress of Zita of Austria: "It gives me great pleasure to the Alpine Club my heartfelt congratulations on reaching its first Centenary."

Once more on this Occasion my thoughts and my prayers go towards your former President gallant Colonel Strutt, whose magnificent support to my family and to myself in the crucial times of the beginning of 1919 I shall always remember in deepest Gratitude. May god protect all the members of the Alpine Club, to whom I send my very sincere wishes for the Alpine future." (終)

## 図 書 紹 介



## ヒマラヤの高峰

深田 久彌著

深田君の追憶記を私は当時三つ書いた。一つはサンデー毎日、もう一つは「あかね」の本の中に挟んだ小さな新聞。三番目はどこへ書いたか忘れてしまった。

まあそれはそれとして、深田君はこの本と「日本百名山」その他のものによって尚われわれの間に生き続けている。都営地下鉄のタダの切符をもらった私などは洵にお恥かしい限りである。この「ヒマラヤの高峰」三巻についても私は「山溪」と「岩雪」に同時に図書紹介してあるが、後者では編集の都合で少し削られている。ところが削られているのか瞭きりは覚えていないが、私は「岳人」に「ヒマラヤの高峰」が載り始めてからそれを全部切りとって箱の中へしまっておいた。そうしたらいつの間にか大きな箱一杯以上になり、ウッカリ持ち上げるとギョッリ腰になるほどの重さになった。——とまあこんななくだりなが抜けていたように思ったが「岩雪」を見直したらこの部分はあった。私もダンダン忘れっぽくなっていくとみえる。今度の白水社版では巻数は三巻にな

ったが、五巻の雪華社版よりも七五座の山が増えて一三五座となっている。これで「岳人」にあったのが全部かどうか調べても見えないが、ヒマラヤと称するところではこれだけの山を研究したら、登ることだけではかた能のない有名なヒマラヤ男よりはるかにましなヒマラヤ通になることが出来る。

深田君はよい友達をもったもので、白水社版の改版では、その道の大家田中栄蔵君が、寝食を忘れ身体まで相当にいじめて旧著の補遺訂正を行ない、現在では最もアップ・ツー・デートなものにした。

しかしこういうものは今日は最新でも来年になるとまた古くなる部分が出てくるので厄介であるが、その他の点——例えば地図や山姿などは田中君の信条が克明に出ていて、読む人には大変理解し易くなっている。

望月、雁部、田中の三君がそれぞれの立場から各巻末にあとがきを書いている。これらの文章も、深田君と関係の深かった人々の手によるものだけに読んだためになる。

ヒマラヤは何と云っても広くて高い。世界の山岳人の憧れの的であり、山の面白さがわかってくれば経験の有無に拘わらず一度は、行って、みて、登りたくなるのが人情である。

それにして日本からは行き過ぎる。日本の登山家は安全技術とか対策をたてているのであろうかと首を傾けている人が沢山いる。われわれにしても遭難隊の裏ばなしを聞いてみると、遭難するものが当然だと思わざるを得ないような人も出かかっているのである。「ヒマラヤの高峰」には特にそういう問題を取り上げて論じている項目はないが、有名な遭難事件を起した隊のことはところどころに詳しく記されている。

だからこの本を読んだ人は表面の記録を知って終ることなく、よく理解、分析して、そのよって来たところを研究しなければならない。そういう読み方をすればこの本も生きてくるし、古くなくてもそういう意味ではいつまでも存在して、登山家の座右の書としての価値を失なわないことと思う。

編集の方法についてはいろんな意見がでてきているが、いまさらツッコミ云ってみたいところで始まらない。自分自分のやり方で利用してはいけいのはないか。とにかく、ヒマラヤに関する価値ある文献として、永久に忘れることの出来ない書物であることに間違いない。深田君がもって生きていて、これを四、五年ごとに自らの手で改訂、というより増補していったら、どんなにいいか、それと思うと彼の早逝が心から惜しまれてならないのである。

(B5判、全三巻、各巻平均六八〇頁、口絵写真八頁、月報挿入、山姿図・ルート図多数掲載、一九七三年六月第一巻、七月第二巻、八月第三巻、白水社発行、各巻定価四、八〇〇円)(吉沢一郎)

## 嵐の大地

エリック・シブトン著  
田村協子訳

シブトンは、少年時代にウィンバールの『大アングレス旅行記』を読んで想像力を奥底からゆきぶられたというし、また、ヒマラヤで活躍していた一九三〇年代に、すでに他の地域、なかでもパタゴニアとフエゴ島に興味を抱き、いつか冒険の旅にでようと考えたと、その自伝的な『未踏の山河』(大賀二郎・倉知敏訳、若溪堂)に書き残している。その夢がかなった四回のパタゴニア行を書いたのが本書である。(L)

AND OF TEMPEST Travels in Patagonia 1958-1962. 最初、本文を読みだす前に、私が注目したのは、その副題にもある「Travels in Patagonia 1958-1962」であった。紀行の年としに関連して、もう一度シブトンの年齢を確かめてみたくなったのである。彼は一九〇〇年代、正確には一九〇七年の生まれであり、この紀行は彼の五〇代の前半になされたものであることを知った。そして、その息の長い、というよりは年齢にかかわらず、常に「Untravel」な地域を目指す若々しい精神に尊敬の念を抱かずにはいられなかった。訳者あとがき中にあるシブトン自身がよせた旅行歴の順をおってゆけば、その念はなお深まるばかりなのである。と同時に、やはり副題にある「Travel」という語にも目をとめた。これを「Mountaineering」あるいは「Exploration」としても、誰れも不思議とは考えないであろう。意識するしないはともかく、未消化のまま登山なり探検という語を使ってしまうがちなのが、現在の私たちの身のまわりではなからうか。それを単に「Travel」としてあるところに、シブトンの人柄とキャリアがしのばれよう。人間社会のわずらわしさを持ちこみがちな大遠征組織をひどく嫌ったシブトンならではの一言ともいえよう。

間をおいて二度ほど読んだがけっしてあきることにはなかった。とかく一度目を通せば胸につかえる武雄伝的な登攀記録とは異なり、頁を開くたびにシブトンの世界へとスムーズに引きこまれてしまう。定評のあるシブトンの筆力によって、未知の土地の風景が目前に展開する。気おおいのない描写に伝えながら、劇的な高まりさえ読者に伝えるのである。さらに彼の同行者やその土地で出会った人々を描く箇所も楽しい。シブトンの文章を叙情的と評する

人もあるが、それに加えて、ヒューモアがひかるものしたいのは私だけのことであろうか。そして、読んでいて、とくにつまづくところのない訳を高く評価したい。ただ、口絵写真がもう少しきれいであつたらと惜まれるのである。

内容は二〇章に別かれて四回の紀行を述べている。第一回・一九五八〜五九年にかけてのラーゴ・アルヘンティナ周辺、第二回・一九五九〜六〇年のビオナ一世山脈での火山の調査、第三回・一九六〇〜六一年のアイス・キヤップ横断、それに第四回・一九六二年のティエラ・デル・フエゴのダーウィン山の登頂である。とくに興味深いのは、第三回の横断旅行であり、パタゴニア特有のすさまじい嵐をついての横引きの苦労がビビッドに描かれている。戦前、ティエラと私とがいつもヒマラヤ遠征計画なんか三十分もあれば封筒の裏にでもすぐ書きたるさ、と自慢していたものだった」とするシブトンも、パタゴニアでは「いい加減な情報や全く相反する忠告などあとからあとから聞いて、あたかも泥沼にはまり込んだような状態におち入ったので、いったいいつになったら遠征計画が出来上がるのやら自分たちでも自信がなくなってきた」と述べている。だが、地道な試行をへて、自らもいう「より野心的な計画」を行動に移したアイス・キヤップ横断の旅がすばらしい。

昭和四十八年十一月 山と溪谷社刊  
A5版二六二頁 定価二二〇〇円  
(横山 厚夫)

THE HIMALAYAN JOURNAL, VOL. XXXI, 1971.  
VOL. XXX, 1970 版から三百頁を



越す厚版の内容となつてゐる。興味の  
ある記事のみを簡単にひらつて紹介す  
る。

はじめの百十頁余りは、わが会の記  
録を含むエベレストに関する記事が続  
き、日本隊の記録はマナスル西壁をは  
じめ六隊を数える。

外国隊の著名な記録では、オースト  
リア隊によるダウラギリ峰の初登頂、  
ポーランド隊によるキンヤン・キッシ  
ニ峰の初登頂などがある。

研究報告では、アドルフ・デームベ  
ルガーによる「ヒンズーラジ」宮森氏  
のサラグラールと「ランガー山群」が  
目につく。

## THE AMERICAN ALP- INE JOURNAL VOL.18.

1973.

海外記録がすくないという理由もあ  
るが、毎号、北米大陸の記録をたん  
ねんに載せてゐるのは伝統といえよ  
う。海外登山記録は南米が三本、ネバ  
ール一本とさみしが、当該年度の世  
界の登山・遠征の抄録は地域ごとに分  
け、CLIMBS AND EXPEDIT-  
IONSの項に詳しい。

今号での最大の収穫は、何といつて  
もアンデス研究の第一人者エチエバ  
リア氏によるアンデス登攀史（一九六  
一～一九七〇年）であろう。

今回はベネズエラからペルーまでを  
載せてゐる。これだけの論文は他では  
見られない。

## HIGHER THAN EVER- EST

会報二四〇号（一九六五年六月）に  
松田雄一氏が紹介しておられる「イン  
ド隊エベレスト登頂」の登頂者の一人  
であるアールワリア陸軍少佐の自叙伝  
である。

若くしてハイキングや登山に情熱を  
いだき、一九五八年にインド陸軍に身  
を投じ、早くも一九六二年の全インド  
陸軍コックタン峰遠征では副隊長に選  
ばれてゐる。

エベレスト遠征では、登頂者の榮譽  
に浴したが、その後発生したバクスタ  
ンとの国境紛争で負傷を負い、車イス  
の生活をせられるなど、その栄光と  
悲惨の皮肉な運命に見舞われたインド  
を代表する登山家の半生記。

(以上山本良三)

「近代登山の先駆者たち」展開催  
にあたり岡野家より金八万円也御  
寄付いただきました。御礼を兼ね  
て御報告いたします。

## 会務報告

### 一月理事会

（十一月午後六時本会ルーム）  
出席者今西会長、中屋副会長、板  
倉、伊倉、近藤、春田、宮下、浜野、  
神崎、松丸、大倉、山本、田村、浜口  
各理事、望月、山崎、金坂各評議員、  
小倉委員（須田理事代理）

### 報告事項

・「近代登山の先駆者たち」鳥水、理  
太郎、金次郎生誕百年展記念について  
（山崎）

（山崎）

十二月二十四日～二十九日、日本橋  
丸善で開催、盛会裡に終了した。記念  
出版した霧の旅刊版、目録等の売れ  
行きもよかったが、残部が相当数ある  
ので、会報等で周知させ、販売を促進  
させた。

・会報発行状況について（山崎）

編集者が不慣れのため、十二月号に  
校正ミスがあり申し訳ない。一月号  
は、年末、年始で印刷が遅れ、二十日  
頃発行になる見込みであるが、二月号

から軌道にのせる。

・山岳六十七年発行について（近藤）

年末までに、印刷所へ入稿の予定で  
あったが、原稿の入手が遅れた。一月  
三十日までには八〇％の原稿入手が可  
能なので、三月三十日発行を目標とす  
るが、総会には間に合わない。

・四十九年度版山日記について（松丸）

十二月二十三日に発行した。近年売  
上部数が頭打ちとなつて来たが、内容  
をよりよいものにして、逐次増冊して  
ゆきたい。なお支部一覽に、岐阜、岩  
手支部の掲載を落し、申し訳けない。

・四十八年度財務報告（伊倉）

会費の納入率は十二月末現在八十四  
％、事業収入も、最近復刻版、その他  
の売上げが伸びたので、年度末で予算  
を上廻ることが予想されるが、物価の  
高騰などにより、支出が増額となり、  
明年度繰越高は、五〇〇万円程度とな  
ろう。また山研建築資金として、繰越  
金のうちから、二〇〇万円借入れをし  
ており、なお支払いがあるので、新年  
度早々に再募金をして、明年度中には  
借入金金を返済したい。

### 議事

・四十九年度事業予算について（板倉、伊倉）

(1) 一月十日締切で各委員会から提出さ  
れた予算は、図書二五万円、海外連絡  
一五万円、高所登山一五万円、指導五  
万円、遭難対策三万円、医療五〇万  
円、集会一〇万円、山日記三万円、  
青年懇談会三万円、学生五万円、婦人  
四万二千元の要求があったが、新年度  
は総花式とせず、各委員会の事業計画  
を再検討して、重点的に予算を組みた  
い。(2) 四十九年度の収入予算を今年度  
同額と考えれば、支出予算は、公共料  
金、人件費その他物価の高騰、会費名  
簿の発行などで大幅に増額となり、大

へん苦しい財政状況となる。経費の節  
減をはかることと、事業収入をいくら  
かも伸ばすことで明年度は切り抜けれ  
ないだろう。内容について財務委員会  
で検討したい。

・四十九年度通常委員会総会の件（板倉）

丁 承

四十九年度の通常委員会総会を四月二  
十日（土）午後三時から赤坂OAG会  
館で開催したい。なお終了後同会場で  
故松方三郎氏の追悼会を開く、詳細は  
常務理事会に一任する。丁 承

・今成、須田両理事辞任にともない候  
補者選考の件（板倉）

今成、須田理事から辞任届が出てお  
るので次の理事会までに候補者を選考  
したい。任期は前理事の残任期間一年  
とする。丁 承

### その他

・スキー懇親会は一月十三日～十五日  
八方尾根黒髪平、中大山荘で開き、約  
四十五名参加予定（神崎）

・山岳図書語る夕は二月二十七日午  
後六時から本会ルームで島田興氏を開  
んできた、山岳史懇談会は三月十五日  
に中塚日高氏を開いて開く、(山本)

・立教大学遠征隊のカンパチン報告  
会を二月二十日午後六時から本会ル  
ームで開く。(大倉)

### 理事会・総会開催日程

・二月一日  
・三月一日  
・三月二十二日（四十九年度予算）  
・四月十二日（四十八年度決算）  
・四月二十二日（支部長会議、総会）  
・四月二十二日 故松方三郎氏追悼会

### 図書室便り

(昭和48・12)

### 新刊図書受入報告

山根達治氏寄贈

(1) 山根達治著『須賀山雑記』昭和48

### 新潮社寄贈

(1) ガストン・レヴィュア著近藤等訳  
『太陽を迎えに』昭和48

(2) 秩父宮家寄贈

(1) 秩父宮家著『雅仁親王実紀』昭和48

(2) 農林出版社寄贈

(1) 大政正隆著『自然保護と日本の森  
林』昭和48

(2) 著溪堂寄贈

(1) 日本山岳会編『山日記74年版』昭和  
49 日本山岳会

(1) 日本山岳会編『近代登山の先駆者た  
ち』昭和48

(2) 日本山岳会編『霧の旅第十九年第五  
十四号』覆刻版昭和48

定期刊行物受入報告

【部報・会報】

(1) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 79  
(48-12)

(2) いづみの山岳会『月報』No. 148  
(48-12)

(3) 東京慈恵会医科大学山岳部『JOCH』  
No. 11 (48-11)

(4) 日本地図資料協会『古地図研究』  
No. 46 (48-12)

(5) 京都山岳会『京都山岳』  
高知グループ・ド・ロック『MON-  
TAGE』73 No. 2 (48-12)

(7) 奥多摩山岳会『O.M.C.レポート』  
No. 288, 289 (48-11, 48-12)

(8) 低く山を歩く『低山』(No. 102  
(48-12))

(9) 日本山岳協会『登山月報』No. 56  
(48-11)

(10) 日本登山協会『山と雪』No. 187  
(48-12)

(11) 東京都山岳連盟『都連通信』(48-9)

(12) 日本自然保護協会『自然保護』No.  
138 (48-11)

【雑誌】

(1) 『アルプ』No. 191 (49-1)

(2) 『地図』No. 44 (48-12)

(3) 『岳人』No. 319 (49-1)



- (4) 『歴程』 No. 183 (48-12)  
 (5) 『山と溪谷』 No. 423, 424 (48-12, 49-1)  
 (その他)  
 (1) 明治大学体育会山岳部・明治大学山岳部・山岳部・明治大学ダウラギリV峰登山計画書  
 (2) 福島食糧会津山の会『いなほ第3号』73-12  
 (3) 日本ネパール協会『シンポジウム・ネパール第2回ネパール研究会』73  
 (4) 日本ヒマラヤ山岳協会『第3回東北ヒマラヤ研究会報告』73  
 (5) 日本登山クラブ『会報6号』70  
 寄贈図書  
 板倉勝正氏寄贈  
 (1) 日本山岳会編『山岳第十四年第二号』  
 島田興氏寄贈  
 松方三郎著『アルプスと人』  
 購入図書(昭和48年10月13日図書交換にて購入)  
 (1) 中村知一著『佐伯宗作遭難の真相』  
 (2) 辻村伊助著『スウィス日記』  
 地図受入報告  
 武田満子氏寄贈  
 (1) 『箱根』  
 洋書受入報告  
 ノ連山岳連盟寄贈  
 (1) ПОВЕЩЕНІЕ БЕРНИНІ 1968-1969  
 (2) ПОВЕЩЕНІЕ БЕРНИНІ 1970-1971  
 【新着海外雑誌】  
 1. "Alpinismus" 73-11  
 2. "Appalachia bulletin" 73-10, 11  
 3. "Der Bergsteiger" 73-11  
 4. "Mountain" No. 29 73-9  
 5. "Österreichischer Alpenverein" 73-9/10  
 6. "Österreichische Alpenzeitung" 73-9/10

7. "Rivista mensile" N. 7 Luglio 73  
 8. 韓国山岳会会報 No. 16 73-10  
 ルーム日誌(48年12月)  
 1日(土) 昭和四十八年度年次晩餐会  
 於 ホテル・ニュージャパン  
 2日(日) 記念展委員会  
 4日(火) 稲門山岳会委員会  
 5日(水) 大学山岳部監督会議  
 6日(木) 記念展委員会  
 7日(金) 理事会  
 8日(土) 記念展委員会  
 9日(日) 記念展委員会  
 12日(水) 山研運営委員会  
 14日(金) 自然保護委員会  
 15日(土) 青年懇談会  
 18日(火) 集會委員会  
 19日(水) 図書委員会  
 20日(木) 第三〇三回小集會  
 22日(土) 記念展委員会  
 24日(日) 図書委員会、書評委員会  
 29日(土) 記念展委員会  
 十二月中来賓者 四〇九名  
 会員異動  
 物故会員  
 四六六二 池田 光二 昭和四八・一  
 二・二三逝去  
 訂正 会報三三七号会務報告(一〇頁) 除籍者氏名欄中 六五二一 森 勉彦とあるを取り消します。  
 上高地山岳研究所建築基金  
 応募者氏名(昭48・1)  
 [単位千円、百円以下切捨]  
 多田隆峰3、岡安正光3、川泉 毅3

# “ヒマラヤ山岳の旅18日間”

問合せ先  
 三井航空サービス株式会社  
 旅客部 団体課  
 東京都港区新橋1-18-1  
 電話(504) 0271 (大代表)

期 間：昭和49年3月10日～3月27日

費 用：¥358,000 (ローン可)

定 員：15名

御案内人：エベレストビューホテル社長  
 宮原 巍氏

安全対策：医師並びに参加者の皆様の安全を図るために、現地人医師を第9日目より15日目までエベレストビューホテルに滞在せしめると共に、酸素ボンベの用意も致しております。

日 程：

第1日目 東京→ニューデリー

第2日目 ニューデリー→カトマンズ

第3日目 カトマンズ滞在

第4日目 カトマンズ→ポカラ

第5日目 ポカラ滞在

第6日目 ポカラ→カトマンズ

第7日目 カトマンズ滞在

第8日目 カトマンズ→ルクラ：徒歩にてモンジョヘ(モンジョテント泊)

第9日目 モンジョ→ナムチェバザール

第10日目 ナムチェバザールより徒歩にてエベレストビューホテルへ

第11日目 エベレストビューホテル滞在

第12日目 エベレストビューホテルよりタンポチェヘトレッキング(タンポチェ泊)

第13日目 タンポチェよりエベレストビューホテルへ

第14日目 エベレストビューホテル滞在

第15日目 エベレストビューホテル→カトマンズ

第16日目 カトマンズ滞在

第17日目 カトマンズ→カルカッタ

第18日目 カルカッタ→東京



# 茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

## 遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年

日本山岳会東海支部

&lt;B 5判430頁・カラー64頁&gt;定価4,800円

## ブータン感傷旅行

小方全弘著 &lt;菊判280頁&gt;定価980円

## 森林・草原・氷河

加藤泰安著 &lt;A 5判482頁&gt;定価1,500円

## すこし昔の話

初見一雄著 &lt;四六判400頁&gt;定価1,200円

## 遠い山・近い山

望月達夫著 &lt;B 6判334頁&gt;定価960円

## 山の古典と共に

大島堅造著 &lt;四六判280頁&gt;定価1,500円

## 雪山・藪山

川崎精雄著

&lt;A 5変型判340頁&gt;定価1,200円

## 雪原の足あと

坂本直行著 &lt;B 5判206頁&gt;定価2,800円

## 山日記1974年版

日本山岳会編

&lt;A 6判342頁&gt;定価850円

## 山 岳

日本山岳会編

&lt;A 5判&gt;

67年 2,500円  
66年 2,300円  
65年 2,000円  
64年 2,000円  
63年 2,200円  
62年 2,000円  
総索引 1,000円

## 国立公園カレンダー

国立公園協会編

&lt;A 5判リング綴り&gt;定価960円

## 屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

&lt;B 6判202頁&gt;定価480円

## 山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編

&lt;A 6判126頁&gt;1集240円・2集280円

## 原野から見た山

坂本直行画文集

&lt;B 5箱入布特製本&gt;定価4,200円

## いろいろばた

南会津山の会

&lt;B 24折り判320頁&gt;定価1,900円

シブトンの自叙伝

## 未踏の山河

大賀二郎・倉知 敬訳

&lt;A 5判440頁&gt;定価1,900円

## 日高山脈

北大山の会編

&lt;菊判362頁&gt;定価2,200円

## 山に忘れたパイプ

藤島敏男著

&lt;菊判584頁&gt;定価2,500円

## 日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

&lt;A 変型208頁&gt;定価3,600円

## 登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

&lt;A 5判350頁&gt;定価900円

## 登山・スキー用具専門店

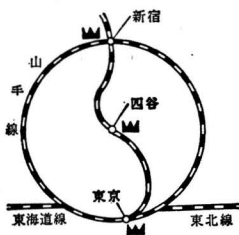
# 山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101  
TEL. 06(362)5736

●買いやすい  
山の店

●北へ来たら  
山の店

●フレッシュな  
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地  
TEL (351) 7432・1912  
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五  
TEL (271) 1560・8575  
新宿店 新宿ステーションビル四階  
サービスショップ  
TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

## 山とスキーの専門店

# 片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なるべし なんにも  
持たない方がい  
けやどし、どうも  
要するものがある  
なにも人間でずかり  
そこで登山ですかり  
どうでも必要なもの  
をこしらえてやる  
主責任はもっています

かたるぐシンテイ  
でんや 281-8456  
中央区八重洲4の1

秀山荘

## 登山とスキー具

# イワタ

東京都中央区日本橋通2-1  
PHON: 271-7686・1718

## 登山用具の専門店

# 好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031  
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店  
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)  
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440

